ベストクラス選定理由書　　作成者：澁江靖弘，吉水裕也，山端真司

科目名称　　美術科教育法Ⅰ （担当教員名：　佐藤　賢司　）	
課　　程　：　学部３年次	開講学期　：　前期（集中講義）
授業形態　：　講義	授業規模　：　30 人以下
インタビュー対象教員名　　佐藤　賢司 （実施日時：7 月 27 日（月）16 時～17 時；実施場所：大阪教育大学佐藤研究室）	
インタビュー対象受講者名　　岡崎紗佑美、稗田望海、黒澤那帆、中崎就英 （実施日時：8 月 3 日（月）10 時 30 分～11 時；実施場所：総合研究棟 3 階中会議室）	

選定理由

受講生の全員が３年生であり、小学校、中学校、高校など教員を目指しているが、美術を専門としない学生が多い。また４日間の集中講義という形態で行われる。

授業でははじめに作品の「完成形」を示すことはしない。教科教育法の授業では、模擬授業などの実践的な内容を志向しがちであるが、意図的に「ゴール」を示すことはせずに学生に自由に創作させている。そして創作の過程の途中で自ら見つける「気づき」を大切にしている。

また、授業では何事も言い切らないことを心がけている。これは言い切ることで価値観を押し付けることになるかもしれないからである。例えば鑑賞の授業では、「対話鑑賞体験」を取り入れている。教員は「何か起こっていますか？」「なぜそう思いますか」という２つの問いかけのみを行っている。「作品のここがいい」という類の声かけではないので学生が自由に表現でき、自分が組み立てたストーリーに沿って話すことができる。そのため、次の創作意欲にもつながる。

また教員は「よい実践家は、子どもの姿にいつも驚いている」という考えに基づいて、学生の創作活動や作品に「驚き」を表現しており、学生からも工夫点などを驚き発見してもらえたことで学生自身が説明できる機会を得て、次回の創作意欲へと繋がると高評価である。これは「学生の内なる子ども性の掘り起こし」を求めての手法だそうである。

後半の授業では２～３人のグループによる模擬授業を設定しているが、そこに至るまでは上記のような授業構成で行っている。各授業は、パワーポイントを使用した教科書的説明、制作活動

フリードローイング（実技）、作品鑑賞体験など毎時間飽きることのないように取り組む内容に変化があり、このことも学生から高評価であった。とくに、「自分の手」をドローイングし、色をつけて立体に仕上げた作品づくりやはんこ制作は学生から話が尽きない程楽しい授業であった。

全体を通して評価言に気を遣っておられる。学生の発言や作品は必ず褒める。そのときに「なんかきれい」というように褒める。この「なんか」を重要だとしており、どこがどのようにきれいという詳しい説明は学生本人からしてもらうためだとのことである。そうすることで学生が自信をつけてくれる。そして上記のように「驚くことができる身体でいる」ように自分自身の内なるこども性の掘り起こしを心がけている素晴らしい教員である。学生からも「とにかく楽しい」「実践もできるし知識面も幅広く学べる」「鑑賞もできあきることがない日替わりメニューのような授業」といった感想があがっていた。以上のように学生の意欲引き出しを組み込んでおり学生が楽しみながら参加していること，からベストクラスとしてふさわしいと考える。